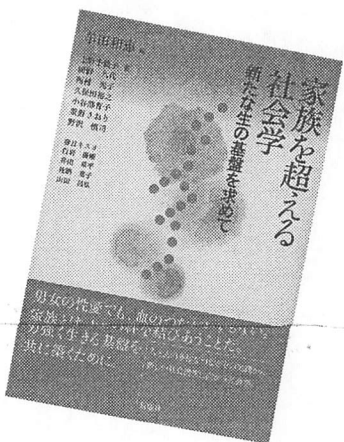


10月5日
新曜社
132



た2章「家族からの出発——に読まれる可能性を意識して新しい社会の構想に向けて」編者は人びとの生きる基盤(岡野八代)は「家族」を「婚姻に基づく小家族」に公的領域から切り離された私的領域に属するものとみなすため、あえて「家族のオルタナティブ」として論じて述べて、ケアの問題が「家族」の問題とされてきたことを批判しつつ、健康な成人である自律的市民を前提としてきた「正義の倫理」から「ケアの倫理」への転換によって新たな社会の構築を目指す必要性を説く。1章「家族の臨界——ケアの分配公正をめぐって」(上野千鶴子)は「親密圏」概念や性別役割分担の解消を求める「平等主義家族」の限界を指摘した後、「依存的他者」との持続的な関係のオルタナティブは可能か?」に示されているように「ケアの人権」の4象限——ケアの受け手とケアの与え手それぞれに選択の有無が積極的に与えられているか否かによって分けられる4分類——を提示する。

本書は6章からなる論文集であるが、序「家族のオルタナティブと新たな生の基盤を求めて——本書のねらい」(牟田和恵)で述べられているように、いずれの章も「これまでの「家族」にとらわれないうち、生きる場・関係の可能性を問おう」とする姿勢で貫かれている。相対化の対象とされる「家族」は異性愛に基づく一組の男女が結婚をし、子どもをもち、性別役割分業に基づいてケア機能を果たすという意味での「家族」であり、いわゆる近代家族を指す。3章「ジェンダー家族のポリティクス——家族と性愛の男女平等」主義を疑う(牟田和恵)では「ジェンダー家族」5章「性愛の多様性と家族の多様性——レズビアン家族・ゲイ家族」(釜野さおり)では「従来の家族」、6章「家族下位文化と家族変動——ステップファミリーと社会制度」(野沢慎司)では「ふ

岩間 敬子

「家族とは何か」という問いを現代社会の文脈のなかで論じる

「家族」が「政治性」を帯びた存在であるという認識

つこの家族」と異なる表現が用いられており、章によってその意味するところには多少の違いが見られるものの、「近代家族」の自明性を問う点で共通している。3章ではフェミニスト法学者であるフラインマンの議論を手がかりとしながら、ジェンダーに基づく分業を前提とする「ジェンダー家族」の脆弱性が論じられる(この問いは4章の「二人性の議論に受け継がれる。)

著者らの批判的なまなざしの根底にあるのは、「家族」が「政治性」を帯びた存在であるという認識である。特に理論編の第一部を構成する1章から3章はいずれも、異性愛主義に基づく婚姻制を批判し、法的制度としての婚姻の廃止などを主張するフラインマンの議論を参照しつつ論を進められていることからわかるように、刺激的な疑問や見解を提示している。「家族」の「政治性」を正面から論じるように思われる。このよう